

ある。(本学助手)

## 後藤先生をしのんで

山川 一安

我々の恩師、後藤丹治先生が急逝された。

この道一筋に、一生を日本文学の研究と教授に捧げられた先生は、もはや再びその温顔を私達の前に現わされることはないのである。

まことに、痛惜のきわみである。

先生の学者としての偉大な業績については多くの人の知るところであり、私などが今更ここに蛇足を加えるまでもない。また、我々の母校立命館の日本文学科において、多くの後進を育て、幾多の人材を世に送られた功績も、永くわが文学部の歴史にとどまるであらう。

私は、昭和二五年から二九年まで、先生のお教えを受けた、そうして先生の学究としての一面にふれると同時に、先生の人間としての面に親しく接する機会を得たことを心から喜びとしている。先生は優れた学者であられると同時に、立派な人格者でもあられた。かざり気のない、朴訥な人柄、淡淡たる口調、

齋六十をすぎてなお失なわれぬ、あの懐しい童顔、そうして我々に接して指導される際には、吾子に教えるように懇切に教えられた。御指導についてはまことに丁寧かつ徹底的で、決してうむことがなかつたのである。

私は大学の卒業論文、大学院の修士論文ともに先生の御指導を受けたが、修士論文についていえば、私は幾度となく先生のお宅へ原稿を持参してお教えを乞い、その都度問題点や疑問点につき先生から御指摘や御指示を受け、帰宅してはそれらの点を検討して書きあらため、又御指導を仰ぎに参上した。その度に先生のお宅で御指導を受けることが深夜に及んだ。それでも、先生は終始温顔に笑みを浮かべ、深更に及んでもなお、興益々到るといったげな表情で、私に指導を与えられた。

そうして、私が辞去しようとする、更にいろいろと念を押されたものであつた。私は八年を経た今、なお昨日の事のように想起するのである。

しかしながら、人の運命ははかりがたいもので、私は種々の事情により、法律の独学をはじめたようになり、遂に畑違いの検事となつてしまった。まことに不肖の教え子であ

る。それでも、時々先生にお目にかかる機会があつたが、先生は畑違いの分野へ去つた私を学生時代とすこしも変らぬ態度で接して下さつたのであつた。

個人的な事を書き連ねて申訳もないが、先生の生前の面影を語りたい余り、ここに記したのである。先生は、教室で、研究室で、教え子達それぞれに、常に誠意をもつて指導、教授に当られた。教え子の多くは、私と同様の感慨や追慕の情をお持ちであらう。

その先生は、突然世を去られた。感慨は限りなく、痛惜の情、まことにたえがたい。しかしながら、先生の不朽の業績は学界に永く生命をとどめ、生前の面影は、我々教え子の心に生きているのである。

ここに、先生のありし日をしのび、謹んで追悼の一文を捧げる次第である。(昭和二九年六月大学院卒、現職、天津地方検察庁検事)